KY: デジタルトランスフォーメーションとは？

Title: DXとは？[初心者向け] デジタルトランスフォーメーションを詳しく解説します。

近年の凄まじいITの発展により、私たちの生活はより便利になってきています。世界中でITに関する新しい挑戦が日々行われていますが、その目まぐるしい変化の中で、十分に理解できていない新しい技術や、言葉があるのではないでしょうか。

その中でも今回は特に、注目を浴びているけど、理解するのが困難な「DX（Digital Transformation｜デジタルトランスフォーメーション）」という言葉について初心者でもわかるように詳しく解説していきます。

<h2>デジタルトランスフォーメーションとは</h2>

世界でも、日本国内でも注目を浴びているDX（デジタルトランスフォーメーション）ですが、一体どのようなものなのでしょうか。

産業省は下記のように定義づけています。

「企業がビジネス環境の激しい変化に対応し、データとデジタル技術を活用して、顧客や

社会のニーズを基に、製品やサービス、ビジネスモデルを変革するとともに、業務そのものや、組織、プロセス、企業文化・風土を変革し、競争上の優位性を確立すること」

DX（デジタルトランスフォーメーション）は元々、2004年にスウェーデン・ウメオ大学スイス人教授、エリック・ストルターマンが提唱したことで始まりました。その内容は「テクノロジーが進化し続けることで、人々の生活はより豊かになる」ということを表しています。

例えば、「自動化」もDX（デジタルトランスフォーメーション）です。Amazonが「Amazon Go」というレジなしのコンビニをオープンしたのは有名な話ですが、そこにはレジがありません。3Dカメラ、AIにより顧客の行動をトラッキングし、持っている商品の代金だけ、お店を出る際に自動で支払われるというものです。

時間の節約になり、長蛇の列に並ぶということもなくなり、ストレスも軽減されるでしょう。結果としてIT技術により人々の生活は豊かになります。これがDX（デジタルトランスフォーメーション）です。

<h2>DXが必要な理由</h2>

ここまででDXが意味するもの、実際にどのように導入をされているか説明をしましたが、それではなぜDXが必要なのでしょうか。

多くの企業が必死になりDXに取り組んでいる大きな理由が、経済産業省が2018年に発表した「2025年の壁」問題です。

「2025年の壁」とは、大多数の日本企業で現在使用されているシステムが、2025年には完全に時代遅れのシステムとなることです。また、ただ時代遅れになるだけではなく、2025年から2030年にかけて年間12兆円の経済的損失を被ると計算されています。

非効率なシステムを使用しているために競争力が低下し、これだけ多くの損失を生むと懸念されているのです。

これらの膨大な損失を避けるためにも、2025年までに現在使用しているシステムから新型のシステムに移行しようと企業が必死に勤めているのです。

その手がかりとなるアイデアがDXなのです。

<h2>まとめ</h2>

DX（デジタルトランスフォーメーション）とは、「IT技術を利用し、ビジネスモデルや組織を変革することにより、人々の生活を豊かにすること」を意味します。

2025年までに現在使用されているシステムは時代遅れになり、大きな損害を日本経済に被るとされている「2025年の壁」問題を解決するために多くの企業がDXに取り組んでいます。

DXは新しいシステムを単に導入するだけではなく、経営の方向性も併せて考えなければいけません。大変な取り組みではありますが、今後の企業、そして日本のためにもぜひ取り組んでみて下さい。